

原発村の池には柳の下のドジョウがうようよ！

放射能劇場 第2幕 「脱原発」骨抜き内閣登場！の巻

菅首相が退陣し、野田新首相が誕生した。キャッチフレーズは「ドジョウのように泥臭く・・・」とのことだ。ドジョウらしく色んなところにクネクネと泳いで行ったら「3 党合意の遵守」の姿勢を見せて腰も折れんばかりに頭を下げる。公明党や自民党、果ては財界の面々も見たことないようなにこやかに表情で野田新ドジョウ・・・おっと失礼、野田新首相を迎え入れる映像がTVで垂れ流されている。言葉は悪いが「薄気味悪い」という感じがぬぐえない。経団連会長-米倉氏などは「すばらしい人事だ」と絶賛して憚らない。ここに全ての答えがある。

菅首相がかかげた「浜岡原発全面停止」「脱原発社会の実現」という政策に対して、米倉弘昌会長は「目的だけが独り歩きする政策はものすごく危険だ」と当初から強い批判をしてきた人物だ。このお方には、**数万人の人々が住む場所を奪われ、未だにさ迷っているこの状況に対して、原子力推進に邁進してきた財界当事者としての反省や謝罪の感覚など微塵もない**。映画「千と千尋の神隠し」に出てくる物欲に取り付かれた醜い化け物「顔なし」にそっくりだ。その人物が最高の賛辞で野田新首相をほめたたえる理由は何か。言わずもがなである。

「脱原発社会の実現」は社会の有りよう、文化や思想の有りようまで変革を迫る重要な課題である。今度の民主党代表選挙で「脱原発」について言及したのは二人だった。前原氏は「20 年を目処に原発から撤退」。海江田氏は鳩山氏に選挙応援と引き換えに脱原発路線の堅持を要求され「40 年を目処に自然撤退」を掲げた。脱原発を言う二人の主張も、よく見れば実質は「継続」である。ドイツやイギリスの老朽化した原発の廃炉作業は 10 年以上経っても未だに終了の目処すら立たない。チェルノブイリ原発に至っては石棺内部が強い放射線で脆弱化し、倒壊・再爆発の危険性に脅かされている。「脱原発」をかかげるということは「直ちに廃炉作業に取り掛かる」ことなのだ。それでも 20 年以上はかかる。あと 20 年運転させてそこから廃炉作業にかかっても 50 年を要することになる。自分の寿命を超えた先まで責任を取れるのか？未来の子どもたちの負の遺産と責任を押し付ける行為だ。

残りの 3 人の候補者の方々は原発に対して口を閉ざす作戦に出たわけだが、結果として反小沢勢力が雪崩をうって結集し野田新首相の誕生となった。マスコミは「反小沢勢力結集」の視点で捕らえているが、深層はもっと深い。

小沢氏に対する異常とも思えるバッシング・排除の論理はどこからくるのか。マスコミも含めて**小沢批判が顕著になったきっかけは小沢氏が親中派であり「日本の米軍基地は横須賀のアメリカ第 7 艦隊で十分だ」と発言したあたりから急速に強くなった**。田中角栄首相は中国との国交樹立を成し遂げたあと「ロッキード事件」というアメリカが仕掛けた謀略の罠に落ち政界から失墜した。その角栄の愛弟子だったのが小沢である。政治手法や中国・アジア諸国との連携強化という政治思想は田中角栄と同じである。(角栄時代、教員の給与も随分と上昇したことが懐かしい・・・)

原発問題は単にエネルギー政策だけの問題に留まらない。使用済み核燃料から取り出されるプルトニウムは核爆弾の原料であり、それらを大量に保有することは実質的に核保有国としてのプレゼンス(軍事的影響力)を持つことと同じ意味を持つ。すでに**宇宙ロケット開発技術を持つ日本は、90 日あれば核弾頭ミサイルを製造できる能力を保有している**。アメリカが日本に原子力を導入したねらいはここにある。**中国・ロシアに対する不沈空母**として日本を実質的なアメリカ支配の元に置くためなのだ。ゴルゴ 13 に出てくるような話でにわかに信じられない方もいるかもしれないが、アメリカには公文書公開制度があり国家機密も一定の年限がくると公開される。それらの外交文書にはこうしたことが全て書かれている。つまりフィクションではなく事実だということだ。田中角栄も小沢一郎もアメリカを完全に敵にまわしたのである。そして小沢の影響に頼った海江田も代表選挙で敗れたのだ。

明日にでも新内閣の顔ぶれが決まるのだろうが、**この内閣は原発村勢力が仕掛けた「脱原発を骨抜きにしよう」内閣**になることはほぼ確実だろう。しかし、全国の原発で発覚しつつある「ヤラセ」問題は、日本の民主主義が為政者によっていかに骨抜きになっていたかを明らかにしつつある。それだけではない。福島第 1 原発事故は、戦後のアメリカによる原子力平和利用に名を借りた「日本の不沈空母化」という支配構造さえも明るみに出しつつある。

原発事故ですっかり話題になった **Sv(シーベルト)**という放射線が人体に与える影響を評価する単位も、**ヒロシマ・ナガサキの原爆投下という人体実験として得られた医学データに基づいて決められた基準**である。かつては原爆によって、そして今度は**原発事故によってフクシマが人体実験場となりつつある**ことを知る必要がある。「文科省 20mS 問題」の背景には巨大な構図が潜んでいる。近頃、マスコミが福島第 1 原発の様子をあまり報じなくなった。TV は事故当初、「インターネット情報に惑わされないように」と繰り返していたが、嘘をばら撒いていたのはむしろ TV の方だったことが次第に明らかになった。今、ネット情報では、福島第 1 原発の状況はメルトダウンした核燃料が地中にもぐり始めた可能性を伝えている。あまりにも高い放射線で作業員が近づけず、放射能の漏洩は続いているのだ。原子力村の面々も数年後には「病気の多発」という現実と直面することになる。衰弱した子どもたちが大量に出現するだろう。**子どもが元気がない社会は必ず衰退する運命にあることを彼らは知るべきだ**。

火山学者がフクシマ放射能汚染地図 最新版

～ 早川 由紀夫(群馬大学教育学部、火山学者・教育学者) ～

火山学者の早川氏がネットにアップした放射能汚染地図を以前に掲載した。国が整備した「Speed」にも匹敵する優れたデータで、自主避難をすべきか迷った人たちにとって大変役立った。最新版が出たので再掲する。またチェルノブイリ原発事故での放射能拡散状況との比較図も下に示した。

チェルノブイリ居住禁止区域の広さに匹敵する面積が福島県を中心に広がっていることがわかる。福島原発事故の場合、避難完了地域はわずかに20km圏内にすぎない。何十万人も人々が高濃度汚染地帯で暮らしている。除染作業が官民間わず始まったが、**素人が安易に除染活動をすすめることは極めて危険な行為だ**。自分で購入した高圧噴水器で地面や屋根の汚染物質を吹き飛ばしている様子をニュース映像で見ることがある。マスクもしていない。そばでは子どもたちが遊んでいる。

チェルノブイリ原発事故の除染作業は軍の指揮の下、防護服に身をくるんだ兵士が大量に投入された。その結果、多くの若者が被曝しガンなどを発症して死んだ歴史がある。

放射能汚染の本当の怖さを知らされないまま、内部被曝が静かに進行していく。知っていながら人々を放置し、データだけが蓄積されていく。

‘人体実験’といわれる所以だ。

